

付録 14

宿命

私たちは、神を信じるか信じないかについて、完全に自由である。私たちが自由な意思を持つこと自体が、神の意志なのである。(18:29, 25:57, 73:19, 74:37, 76:29, 78:39, 80:12)。

私たちが「原罪」(付録 7 を参照)を犯した後、神は私たちに、その罪を非難し神の絶対的な権威を受け入れる機会を与えてくださった(33:72)。しかし、私たちはサタンが「神」としてどれほど有能であるかのデモンストレーションを見たいと決めてしまった。多くの人々は、自分たちをこのような過酷な試練に合わせるために創造したことについて神に抗議をする。明らかに、そのような人々は次のことに気づいていない。[1] 彼らが恐ろしい罪を犯したこと(序文および付録 7 を参照)、そして [2] 彼らには罪を非難し自分自身を救うチャンスが与えられたにもかかわらず、自ら試練を受ける道を選んだということである。

57:22 から、私たちの人生は、周囲のあらゆる出来事とともに、ビデオテープのようなものにあらかじめ記録されていることがわかる。神は、私たちがどのような決断を下す運命にあるかを完全に知っておられる。誰が天国に行き、誰が地獄に行くのかを神はご存じである。この世界に生まれる前から、神はどの魂が善で、どの魂が悪であるかを知っている。神の全知全能という観点からすれば、全員の額に「天国」または「地獄」というスタンプが押されていると想像することもできるであろう。しかし、私たち自身の視点に関する限り、神の絶対的な権威側に立つか、サタンの多神論的な見解に与するかは、完全に自由である。したがって、宿命とは神から見た場合の事実であり、私たちから見た場合の事実ではない。

この理解は、「神は、自ら望む者を導き、自ら望む者を迷わせる」と述べている数多くの節を説明するものである。神はその知識に基づき、私たちの魂を相応の状況に割り振りする。神が天使たちに「私はあなたがたが知らないことを知っている」(2:30)と言われたとき、それは私たちの中には自らを救うチャンスに値する者がいることを意味していた。導きに値する者への神の導きの例の一つが 21:51 にある。「我々はアブラハムに導きを授けた。我々は彼を十分に知っていたからである」。言い換えれば、神はアブラハムが導かれるにふさわしい善良な魂であることを知っており、彼に導きと理解を授けた。もう一つの良い例は 12:24 に記されている。ヨセフはエジプトの貴族の妻に心を奪われ、「もし主からの印を見ていなかったら」姦通を犯すところだった。神は 12:24 で、「ヨセフはわたしの献身的な崇拜者の一人であったため、彼から悪と

罪を遠ざけた」と教えている。欲情を抑えたのはヨセフだったのだろうか？ それとも、彼を純潔に保ったのは神による罪からの保護だったのだろうか？ これこそが「定命」である。